

ゲイ・バイセクシュアル男性と BL 作品の境界線

——「おっさんずラブ」と「消えた初恋」を当事者はどう受け止めたのか

本論文は、BL を主題としたコンテンツと当事者であるゲイ、バイセクシュアル男性の現実との間に生じるずれや重なりについて明らかにする。そのために、テレビ朝日系列土曜ナイトドラマで放送された「おっさんずラブ」とテレビ朝日系列オシドラサタデーで放送された「消えた初恋」、2つの BL 作品を比較し、各ドラマの様々な表現を当事者がどのように受け止めているのかについて考えていく。

研究するにあたって、本論では自身の性的指向をゲイまたはバイセクシュアルのどちらかだと自認している 23 歳の男性 1 人に半構造化インタビューを行った。質問内容は BL 作品への接し方やドラマの具体的な描写の受け取り方についてなどである。

結論、当事者と BL 作品にずれは生じているということができ、重なっている部分もあるということが出来る。しかし、BL 作品と現実の間で生じているずれや重なりにはあまり嫌悪感を抱いてないということが分かった。BL 作品の内容に関しては基本的に「フィクションだから」という考えを貫いており、道徳の範囲内の表現であれば嫌悪感を抱くことなく受け入れているということが分かった。

また、ある程度リアリティがありながらも、リアリティがありすぎない展開や表現を求めている。作品と現実が生じるずれから、作品を見た人に実際にも簡単に恋愛が上手くいくと誤解されることに若干の違和感を抱いているため、リアリティを求めているものの、ドラマとしての面白さも求めている。そこから、ドラマが成り立つ程度のリアリティを求めていると考えられる。これにはインタビュー内で一貫していた「フィクションだから」という考えが関係していると考えられる。

そして、BL 作品の表現や BL 作品を好む腐女子の存在には「個人の好み」として考え、受け入れていた。そのため、性描写も人の好みとして受け入れており、特に嫌悪感は抱いてなかった。この「フィクション」と「個人の好み」という 2つの考えが、作品と現実の間で生じているずれ、重なりを当事者が受け入れられる理由であり、当事者が求めている表現にも大きく関わってくる考えだということがわかった。

本論では実際の BL 作品の表現を元に半構造化インタビューを行ったため、当事者の作品に対する素直な意見を取り入れることが出来たと考えている。